

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

15

Minazuki Shizuru

水無月静琉

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなる。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

ラジアン

タクミの契約獣となった
グリフォン。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。小型にもなる。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

フィート

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなる。

登場
CHARACTER
人物

第一章 新たな出会いをしよう。

僕は茅野巧^{かやのたくみ}。エーテルディアという世界の神様の一人、風神シルフィール——シルの力によって転生した元日本人だ。

何故、転生したかというところ……シルが起こしたうっかり事故で、予定外に僕が死んでしまったからだ。そして、責任を感じたシルが僕を転生させてくれたのだ。それも、自分の眷属^{けんぞく}としてね。

そうしてやって来たエーテルディア。気がついた時にいたのは、ガヤの森という危険な森の中だった。

そこで、名もない双子の子供と出会い、放って置けずにアレンとエレナと名づけ、自分の弟妹^{きょうだい}として一緒に過ごすことにした。その後、二人が水神様の子供だということが判明したが、水神様からは音沙汰^{おんさた}がないので、僕達はそのまま一緒に気ままな冒険者暮らしをしている。

そして、あれよあれよといううちに、この世界にやって来て二回目の新年を迎えた。

「アレン、エレナ、行くよ」

「は〜い」

つい先日、七歳になったばかりのアレンとエレナは、しばらくはルーウェン邸で大人しくしていた。

だが、新年を迎えてすぐに遊びに行きたいと騒ぎだした。

そのため、本日は冒険者ギルドに行つて、軽い依頼を受けることにした。

「ギルド〜♪ ギルド〜♪」

二人はご機嫌に歌っている。それも、手を繋いでスキップしながらね。

「仲が良いな〜」

「なかがいい、ダメー？」

「駄目じゃないよ。そのままずっと仲良くして」

「うん！」

大きくなっても仲が良いまだといいな。

というか、反抗期とかになったら僕へのダメージが凄いことになりそうなので、素直なまま成長してほしいものだ。

「ん〜？」

冒険者ギルドに入つてすぐ、アレンとエレナがとある女性の冒険者を——じい〜……と見つめた。

「へび〜？」

「よくわかったね」

「「おお、へびだ！」」

その女性の腕には白い装飾品が着けられているように見えたが、それは装飾品ではなく白へびだったようだ。ということは、彼女はティマーかな？

「怖くないかい？」

すると、僕達の視線に気がついて、その女性冒険者が話し掛けてきた。

「「だいじょうぶ！」」

「ふふつ、そうかい。大の大人でも怖がる者が多いんだがな〜」

「かわいいよ？」

「さわつてもいい？」

首を傾げる子供達に、女性冒険者は頷く。

「構わないよ。撫でてやってくれ。あ、私はアーヤ。この子はキルティだよ」

「アレンはアレン！」

「エレナはエレナ！」

「双子かい？」

「うん！」

アレンとエレナはあつという間に女性冒険者——アーヤさんと仲良くなっていた。

「あつ！　こんにちは！」

「はい、こんにちは」

「しつれいしますー！」

「ふふっ、礼儀の良い子だね。どうぞ」

そして、忘れていた……とばかりに急いで挨拶すると、白へび——キルティを撫で始める。そんな双子を見ながら、アーヤさんが僕に話し掛けてきた。

「この子達の兄さんかい？」

「あ、はい。初めまして、タクミと申します」

「キルティは無闇に人を害さないから、安心してくれ」

「ご丁寧（ていねい）ありがとうございます。うちの子達が突然無理を言っすすみません」

「私はキルティのことを可愛いと思っているが、どうしても苦手だと言う者のほうが多いんだ。だから、こんなに臆（おく）さないでくれるなら、逆に嬉しいくらいだよ」

まあ、爬虫類（はちゅうるい）は苦手（きず）に思う者も結構な割合でいるだろうしな。

「その子は……ヘルスネイクですか？　凄（すご）いですね」

ヘルスネイクは、Bランクだったかな？　小さいが、猛毒（もうどく）を持っているへびの魔物だ。

そんな魔物を捕獲（ほかく）するなんて、かなり難しいだろう。

「運よく生まれたばかりの頃に出会ってね」

「なるほど。でも、最初は運でも、そこまで懐いているのはアーヤさんが可愛がつているからですよ」

しっかりと懐いているので、刷（す）り込みだけっていうことはないだろう。

「アーヤ、ちよつといいかし——あら？」

「あ、マイラか、すまん。ちよつと待ってくれ！」

「何か問題が……というわけではないのですね？」

「問題はない。キルティを紹介しているだけだ」

アーヤさんの仲間らしき女性がやって来ると、アーヤさんとうちの子達を交互に見て、目をぱちくりさせていた。

「その子達、キルティを怖がつていないのね」

「そうなんだよ！　可愛いって言ってくれたんだ！」

アーヤさんは満面の笑みだ。余程、キルティを褒められたことが嬉しかったのだろう。

「マイラ」

「アーヤさんはいました？」

「エリー、マドリカ、こっちよ」

さらに二人の女性がやって来る。

「ああ、兄さん。彼女達は私と『ソレイユ』というパーティを組んでいる三人だ。最初に来たのが

マイラ、後ろの二人はエリーとマドリカだ」

僕の表情が訝しげなものに見えたのか、アーヤさんが慌てて仲間を紹介してくれる。

「えっと、タクミと申します。その子達の兄です」

「……タクミ？　そして、双子……あつ！　ここのギルドの有名人！」

「うえ!?　何ですか、それは！」

エリーさん？　マドリカさん？　どちらかはわからないが、突然僕のことを指差し、訳のわからないことを言い出してきた。

「青髪の双子を連れたタクミって人物は、『刹那』と呼ばれるAランクの冒険者だって聞きましたよ！　うわっ！　凄い！　本当に若い！」

「まあ、エリーさん、それは本当なの？」

「本当だよ、マドリカ。ここを拠点にしている冒険者達に聞いたんだから！」

訳のわからないことを言い出したほうがエリーさんのようだ。

話の内容は……噂の類かな？　冒険者達が僕のことを話していて、それを聞いたんだと思うが……こうやって面と向かって叫ばれたのは初めてだ。

すると、アーヤさんがそんなエリーさんを咎めるように言う。

「エリー、タクミさんに失礼よ。指を差さないの！」

「あ、ごめんなさい」

「タクミさん、うちのメンバーが失礼なことをしてすみません」

「い、いえ……」

叫ばれたことにも驚いたが、僕が子供達にするような注意をされていることのほうが驚いたかもしれない。

「若いのにAランクって聞いていたけど、思っていた以上に若くて驚いてしまったのよ」

「あゝ、それはまあそうかもしれないけどね」

エリーさんがそう言うのもわからなくはない。ランクはコツコツ上げるものなので、僕のような年代でAランクになる人は少ないだろうしな。

「エリー、本当に気をつけなさいよ」

「ごめんなさい。それにしても……子供達もなかなか胆力の持ち主だって聞いていたんだけど、それも本当のことだったみたいね。キルティを平気で撫でる子供なんてそうはいないわ」

キルティを撫でる子供達を見て、エリーさんだけでなく、マイラさんとマドリカさんも苦笑している。

「あの子達は、どんな生きものも好きなほうだと思うので」

敵意さえなければ、どんな種類の生きものでも仲良くなる可能性はある。

逆を言えば、どんなに見た目が可愛い子でも、敵意があれば絶対に仲良くならないだろう。

「『ソレイユ』の皆さんは、どこか別の街から来たんですよね？」

僕もここが拠点というわけではないので、拠点にしている冒険者の顔を全部知っているわけではない。だが、女性だけのパーティは印象に残るし、話題にも上りやすいはずで、耳にしたことがないってことは、他所^{よそ}の街から来たパーティなのだろう。

「ええ、そうです。私達はクレタ国の王都が拠点。ここへは護衛依頼で来ています」

質問してみたら、代表してマイラさんが答えてくれた。

先ほどのやりとりを見る限り、しっかり者っぽいマイラさんが『ソレイユ』のリーダーかな？

「へえ、クレタ国からですか」

クレタ国といえば、双子王子やグリフォンのことを思い出すな。そういえば、生まれたグリフォンの子供は元気に育っているだろうか？

「ほら、アーヤ、そろそろ依頼を探しに行きますわよ。リーダーなのだから、しっかりなさい」

すると、マイラさんが意外な言葉を口にした。

「……あれ？」

「タクミさん、どうなされましたか？」

「いえ……勝手にマイラさんがリーダーだと思い込んでいて、少し驚いただけです。すみません」
リーダーはどうやらアーヤさんだったようだ。

「ああ、そういうことですの。謝らなくても構いませんわ。実力はアーヤが一番ですので、リーダーをさせています。私はどちらかというと参謀^{さんぼう}。あとはお財布係^{さいふけい}ですね」

「……お財布係」

「うちはお小遣^{こづか}い制なんです」

「それはまた珍^{めづ}しいですね」

パーティの場合は、経費分を除いて残りの依頼料を等分したりするものだ。

「でないと、三人ともいつの間にかに全財産を使ってしまうので」

「全財産!？」

「そうなんです。アーヤは武具や魔道具、エリーは主に食べもの、マドリカは薬関係。すぐに興味が出たものを購入してしまうんです。なので、強制的に預金分^{ちきんぶん}を徴収^{ちやうしゆ}して、残りをお小遣いとして渡すんです」

「……」

……お小遣い制か。アレンとエレナと似たような感じだな……と思ったことは間違っても口に
出せなかった。

「マイラさんが信頼されている証拠ですね」

しかし、お小遣い制というのは、僕と子供達みたいな関係なら簡単に成り立つが、家族でもない
大人同士だとわりと難しいと思う。

信頼がないと成り立たないよな。

「そうね。付き合いが長いのもありますけれど、私の実家が商会だっているのも大きいのでしょ

うね」

「え、商会の方なんですか？ あれ、でも、それが信頼とどういう関係があるんですか？」

「一応、クレタ国では名の通った商会ですの。そして、私がその者というのはクレタの冒険者ギルドではわりと周知されています。ですから、私が下手なことをしますと、多少なりとも商会にも影響されると思いますの」

「ああ、なるほど……」

後ろ盾への影響か。縁者が金銭トラブルを起こした、なんて話が出たら間違いなく問題になるし、後ろ盾が有名であればあるほど大きなダメージになるだろう。

僕が問題を起こした場合も、後見であるルーウェン家やリスナー家に関わってくるってことだよな。迷惑がからないように気をつけよう。

「商会のことがなくても、私はマイラのことを信頼しているぞ！」

「ふふっ、ありがとうございます。アーヤ」

良い信頼関係を築けているパーティのようだ。

「おにいちゃん、おにいちゃん」

「ん？ どうした？」

存分にキルティを撫でて満足していた子供達が、くいくいと僕の服を引きながら呼びかけてくる。

「ジュールたちを」

「キルティに」

「「しょうかいしたい！」」

「……あゝ」

どうやら僕の契約獣達をキルティに紹介したいようだ。

「キルティに誰を紹介したいって？」

「実は……僕も契約している子がいるんですが……」

「そうなのか!? 契約っていうことは、そうか！ 今は影に控えているんだな！」

僕が言い淀んでいると、アーヤさんははっとした様子で僕の影を見つめる。

「ただ、あまり人前で連れて歩いていないんですよ」

「私も会ってみたいが、それならここでは無理だよな」

「「だめー？」」

「絶対に駄目ってわけじゃないけど……騒ぎになるのは嫌だな」

「「それはやだね」」

アレンとエレナが腕を組んで、*ぐうん*と唸るように悩む。

「みなさんはこれから依頼ですか？」

「ん？ ああ、そうだよ。私達はマイラの実家、オルバータ商会の護衛で来たんだけどね。商会の用件が終わるまでは自由にされていて良いってことになっているんで、この国の依頼を確認しがた

軽いものを受けようって話をしていたんだ。——はっ！ 兄さん達も依頼を受けに来たんだよな？」

「はい、そうです」

「それなら、一緒に依頼を受ければいいじゃないか！ 郊外なら従魔を紹介してくれるんだよな？」

「おお〜」

アーヤさんが閃いたとばかりに、晴れやかな表情をする。

アレンとエレナも「その手があったか」と感嘆の声を上げた。

「マイラ、いいか？」

「アーヤ、落ち着きなさい」

「駄目か？」

「私達のことよりも、まずはタクミさんのほうの了承を得ないと駄目ですわよ」

「あ、そうか！——兄さん！」

マイラさんの言葉を聞いて、アーヤさんが僕のほうをじい……と見つめてくる。

「「いらい、いっしょにいきたい！」」

アレンとエレナはキラキラした目で見上げてくる。

「わかった、わかった。——この通り、僕達のほうは歓迎です」

「アーヤは賛成ね。エリーとマドリカも……良いみたいね。——タクミさん、是非ご一緒させてください」

マイラさんは仲間がしっかりと頷くのを確認し、にっこりと微笑みながら合同依頼を承諾してくれた。

「「わ〜い」」

「おねえちゃん」

「いらい、なににするー？」

「そうだな〜。——マイラは先に依頼を見てきたんだよな？ 何か良い依頼はなかったか？」

子供達とアーヤさんは、すぐさま受ける依頼について話し出す。

「私達はBランクパーティです。失礼ですが、タクミさん達のパーティランクは何かしら？ それ

によっても受けられる依頼が変わってきますわ」

「僕達はCランクです」

「……あら？」

「「えっ!？」」

僕達のパーティランクを聞いて、『ソレイユ』の皆さんは驚いたように声を上げた。

僕がAランクだと知っていても、子供達とパーティを組んでいるので、もっと低いランクだと思うのが普通だ。それで驚いたのだろう。

「え、まさか、この子達……Cランクなのですか？」

「ええ、そうです」

「ええ〜、わ、私と一緒になんですか〜……」

子供達のランクを知ると、マドリカさんがつくりと項垂^{うなだ}れていた。どうやら彼女はCランクのようだ。

シヨックを受けているのはマドリカさんだけだし、パーティのランク的に他の三人はBランクなのだろう。

「凄いな！」

「すごいっ！」

「ああ、その年でCランクは凄い」

「えへへ〜」

アーヤさんに褒められて、アレンとエレナは照れていた。

「えっと……僕が言うのもなんですが、うちの子達は規格外だと思うので気にしないでください」

「うう……」

「マドリカは筆記試験のほうは問題ないのですが、少々戦闘に課題があるんですよ。Cランクになる時でもギリギリでしたの」

「Bランクに上がるには、さらに個々の戦闘能力が求められますもんね」

試験を受けたわけではないので詳しいことはわからないが、Cよりも上のランクになるためには、試験官付きでの魔物討伐というものがあつたはずだ。その試験が合格できないんだな。

「マドリカは回復魔法のほうが得意だからな」

「ああ、なるほど。でも、パーティとしては回復手段を持つ方がいると、安心ですよね」

「そうだな。戦闘のほうは私が補うことができるから、マドリカのランクがCのままだろうと問題はないんだ。だが、マドリカ本人が気にしてな」

マドリカさんは支援系の冒険者のようだ。それなら戦闘が不得意でも仕方がない。

だけど、自分だけ下のランクだと、負い目に感じてしまうのかな？

「兄さん、一緒に行動した時、何か気づいたことがあつたら助言してやってくれないか？」

「ええ、構わないですよ。お役に立てるかわかりませんが」

まあ、合同依頼をしている最中に何か気づくことがあれば、アドバイスはしよう。

ただ、これはマドリカさんの心次第のような気がするんだよね。

「それよりも、アーヤさん。兄さん、じゃなくてタクミって呼んでもらえませんか？ 僕のほうが年下っぽい……年下ですよね？」

「あ、ごめん、ごめん。そうだよな。悪かったよ、タクミ。でもな、私は特に気にしないが、女性に年齢の話題は気をつけたほうがいいぞ」

「……はい、すみません」

たぶん、二十代半ばだろうと思われるアーヤさんに「兄さん」と呼ばれるのは微妙に感じたので、呼び方を訂正^{ていせい}してもらった。

その時、アーヤさんはあっけらかんとしていたが、マイラさんのほうから鋭い視線が飛んできたので、僕は思わず身を固くしてしまった。

◇ ◇ ◇

結局、『ソレイユ』との合同依頼は、いくつかの葉草の採取依頼を受けることにした。

「おにいちゃん、ここならいい?」

「うん、この辺まで来たら大丈夫だな。——おいで」

街から離れたところで、僕はジュール達を呼び出した。

「「「わあ……………ええっ!?!」」」

『ソレイユ』の皆さんは、小さなフェンリルのジュールと飛天虎のフィート、フォレストラットのマイルを見たところまでは感嘆の声を上げていたが、サンダーホークのボルトを見て黙り込んでしまい、最後にスカレットキングレオのベクトルを見て驚きの声を上げていた。

やはり、小さくなつていてもスカレットキングレオは誤魔化せないってことだな。

「タ、タクミ、え、従魔? ほ、本当に?」

アーヤさんがベクトルに対して警戒するようにしながら尋ねてくる。

キルティも小さな声で『シャーッ』と鳴いている。ん? 泣いているわけじゃないかな?

「大丈夫ですよ。みんな、うちの子です」

「「みんな、やさしいんだよ」」

まあ、言葉で何を言われても、受け入れられるかは別問題かな?

とりあえず、しばらく待ってみることにしよう。

《お兄ちゃん、今日は他の人もいるんだね? 仕事?》

「うん。一人、ティマーの人がいて、アレンとエレナがその人の従魔と仲良くなったんだよ。それで、二人がみんなを紹介したいって」

《あ、本当だ。あれは……ヘルスネイクだね》

《真っ白い綺麗な子ね。でも、ちょっと私達のことを怖がっているのかしら?》

ジュールが今どういう状況なのか確認してきたので、僕は説明しながらジュールとフィートを抱き上げる。『ソレイユ』の皆さんに向けて、二匹をしっかりと確保していますよ………という意味合いも込めてね。

《じゃあ、まだ近づかないほうがいいですね》

《わたしは大丈夫だと思うけど、みんなは止めたほうがいいの!》

すると、ボルトとマイルもそれぞれ僕の肩の上によつて来る。

とりあえず、僕の近くにいたほうが良いと感じたようだ。

「ベクトルは……大丈夫だな」

あとはベクトルをどうするかな〜と思ったが、伏せたベクトルの上にアレンとエレナが乗っていた。

「……凄く大人しい子達だな」

「ええ、利口な子達ですね。でも、魔物相手だと容赦ようしやがないので、大人しいとはまた違うかな？」
どちらかといえば活動的な子達ばかりなので、大人しいと言い難いがたけどな〜と思いつつ、アーヤさんの言葉に頷く。

「三匹はまだ子供だろう？ それでももう活発的なのか」

「あ、その三匹は【縮小化】スキルで小さくなっているだけで、子供ではないんですよ」

「っ!! 全員成獣なのか！ え、ちょっと待ってくれ！ そうなると、私が仔犬こいぬと仔猫だと思っているその二匹は……」

「フェンリル！」

「ひてんこー！」

「っ！」

アーヤさんが恐る恐るジュールとフィートの種族を聞いてきたのに対して、アレンとエレナがあつさりすつぱりと返答する。

すると、アーヤさんは息を呑み、見事に硬直じょうちよくしてしまっていた。

「……す」

「す？」

「凄い、凄い！ 凄いよ、タクミ！ Sランクが三体だなんて！ 凄すぎるよ！」

アーヤさんは驚きか恐怖で固まっているかと思いきや、頬を紅潮こうしやうさせ、興奮しながら絶賛してくる。

「元の姿を見せてくれないか！」

「いいですけど……大丈夫ですか？」

「大丈夫だ！」

「そうですか……—ジュール、フィート、ベクトル、大きくなって見せてあげてくれるか？」

《いいよ》

《もちろんよ》

《わかった》

ジュール、フィート、ベクトルの三匹に元の姿に戻ってもらう。

「おお！ かつ、格好かっこ良い」

そんな三匹を見て、アーヤさんは目を輝かせていた。

どうやら、ティマーなだけあって、アーヤさんは動物好きのようだ。

「な、撫でてもいいかな？」

《じゃあ、まずはボクのことを撫でてみる？》

ジュールが了承するようにアーヤさんに近づいていく。

「うわぁ……。凄いな……」

《ふかふかでしよう？》

「そうだな。凄くふかふかだ」

アーヤさんの言葉を聞いて、ジュールが誇らしげに胸を張る。しかも、自然にジュールと会話をしているではないか。

そういえば、ルーウェン邸ではすぐに馴染んだので忘れていたが、ジュール達の【念話】スキルの熟練度が上がって、僕達以外にも会話可能になったのだった。

一応、外というか、他者に対しては会話を控えていたのだが……すっかり警戒心を取っ払ってしまっただな。アーヤさん達は良い人達のようなので、まあいいけどね。

「アーヤおねえちゃん」

「ベクトルもさわってみる？」

「ちよつとごわごわだけど！」

アレンとエレナがベクトルをからかいつつ、アーヤさんにベクトルを触るようにすすめる。

《アレン、エレナ!? ごわごわは言わない約束でしょう!》

「やくそくしてない!」

ベクトルは自分の毛が剛毛なことを少し気にしているようなので、若干涙目になっていた。

「アレン、エレナ、毛質のことでベクトルをからかうのはもう止めよう。可哀想だろう？」

「「ええ」」

ベクトル自身がコンプレックスに感じていることをからかうのは良くないと思ったので、子供達に止めるように言ったが、二人は納得しない。

すると、アーヤさんが助け舟を出してくれた。

「固い毛質は、身を守ることに長けている証拠だ。これはな、刃物なんかは簡単に通らないってことなんだぞ」

「「そうなの？」」

「そうだぞ。凄いことだぞ」

「「おお、ベクトル、すごいんだ!」」

すると、ベクトルは得意げな顔をする。

《そうなんだよ! オレ、ナイフとかでは絶対に傷つかないのはこの毛のお蔭なんだよ!》

「「そっか。ベクトル、ごめんね。もうごわごわ、いわない」」

《本当!? もう言わないでね! ——うう、このティマーさん、良い人! アレンとエレナを説得した……》

なるほど、ただ止めると言うだけでは駄目だが、どうしてこういう毛質なのかを説明すると子供達も納得するのか。

「アーヤさん、ありがとうございます」

「私は知っている事実を言っただけだよ」

ベクトルはすっかりアーヤさんに懐いたのか、小さな姿に戻ると頭をぐりぐり押しつけていた。大きい姿じゃなくて、小さくなってくれて良かったよ。大きいままだと、アーヤさんを潰しかねないからな！

「おっ、なんだなんだ？」

「懐いたみたいですね」

「おお、そうか！ それは嬉しいな！」

アーヤさんはわしゃわしゃとベクトルを撫で始める。

《あゝ、そこそこ。そこ、気持ちいい》

「ん？ ここか？」

《あゝ……》

すると、よほど気持ちが良いのか、ベクトルがうつとりし始める。

「アーヤは馴染むのが早いわよ」

「本当ですね」

「まあ、アーヤは動物好きだもんね」

マイラさん、マドリカさん、エリーさんは呆れたようにアーヤさんの行動を眺めていた。

「いや、だって、どの子も可愛いじゃないか！」

「そう断言できるのが、アーヤらしいわ。——タクミさん、時間を掛けてしまつてごめんなさいね。もう落ち着きましたわ」

「いえ、こちらこそ驚かせてしまつてすみません。えっと……このまま依頼続行で大丈夫ですか？ 紹介もできたので、影に戻つてもらうこともできますよ？」

僕の提案に、『ソレイユ』の皆さんは首を横に振る。

「一緒に大丈夫ですよ。これでもテイマーの仲間ですからね。ただ、種族が大物ばかりでしたから、すぐに動けなかっただけですわ」

「そうそう。これだけ凄い子達と一緒に依頼できるなんて、こんな貴重な体験、滅多にできることじゃないし、絶対に逃しちゃいけないよね」

「確かにそうね。そう思うと、わくわくしてきますわ」

アーヤさんだけでなく、マイラさん達もジュール達に慣れてくれたようだ。

「みんな、いつしよ」

《何だか、今日は賑やかな依頼になりそうだね》

《あら、私達はいつも賑やかだよ？》

《そうですね。ぼく達はいつも賑やかに過ごしています》

《じゃあ、いつも以上にわいわいするの！》

話は決まり、僕達は薬草探しを開始することにした。

そうして始まった薬草探しは、とても順調に進んだ。

《あ、ここにリリエ草があるよ》

《こっちにもあるわね》

「オジギそうがあったよ」

「ボボそうもあったの」

ジュールやフィート、子供達はどんどんいろんな薬草を見つけて採取し、僕のところへと届けに来る。

《あ、グレイウルフだ。倒してくる》

ベクトルは魔物を見つけるといつものように颯爽と駆け出して行き、あっさり倒すと獲物を引きずって戻ってくる。

《兄上、こっちにユズユの実が生っています》

《タクミ兄、エナ草も生えているの！》

ボルトとマイルは果実や野菜を見つけて、たつぷりと収穫して戻ってくる。

「薬だな」

「……そうね、薬ね」

「とても薬ね」

「うん、薬だわ」

『ソレイユ』の皆さんは、呆然としながら子供達の動きを目で追っていた。

「私達、ただの散歩になっているな」

「本当にね。これでいいのかしら？」

「まあ、大人として駄目でしょうね」

「だけど、まったくもって出番がないんだよね」

「……ははは」

僕を含め、『ソレイユ』の皆さんが動くまでもなく、採取も魔物討伐も子供達の働きで終わってしまうのだ。

僕としてはいつもの光景だが、やっぱり大人として駄目だという意見を聞くと、心にぐさぐさと何かが刺さる。やはり、今後は改善が必須だな。

「しかし……凄く魔物を従魔にすると、これほど依頼が捗るんだな」

『……………シュ』

「いやいや、キルティも凄く、いつも助かっているぞ！ 落ち込むことはないぞ！」

「今のは、アーヤの失言ね。キルティが可哀想」

「マイル、何を言うんだ！ 私はキルティのことは可愛いと思っているし、とっても助けられてい

ると感じている！ それとは別で、タクミの従魔が凄すぎるっていう話をしているんだ！ あれは別格すぎるだろう？」

アーヤさんは、ただただジュール達の出来を褒めてくれたのだろうけれど、キルティからしたら比べられた感じがしたのだろう。

「キルティ……ヘルスネイクの牙には、猛毒があるんですね？」

「ああ、かなり強力な麻痺毒だぞ。殺傷性はないが、咬んで数分で意識を失うな」

「数分ですか。それは強力ですね」

「そうなんだよ！ しかもな、ヘルスネイクの麻痺毒は、数時間で効果が消えるから、食肉にも影響がないんだ！」

ヘルスネイクの毒が猛毒だということは知っていたが、それが麻痺毒だということは知らなかったな。それも、食用の肉が駄目にならないとは凄い。

……でも、毒が消えてなくなるとはいえ、一回毒に侵されたものって……嫌がる人は一定数いるんじゃないかな？

「キルティが魔物を麻痺させたところを仕留めて確保した肉は、普通に売れるんですか？」

「ああ、それは大丈夫だ。ギルド側もしっかりと鑑定して、肉の状態を確認するしな！」

「へえ、それならキルティの毒は便利ですね」

もともとヘルスネイクという種族が、獲物を生きたまま確保して食料にするために、そういう毒

を持つことになったってことかな。死んでしまうような毒だったら、狩った側も食料にできなそうだしな。

「なにになに？」

「なんのはなしー？」

「ん？ キルティの牙の毒は便利だなっていう話をしていたんだよ」

アレンとエレナが籠にたつぷりと薬草を入れて戻ってきた。

「キルティのどく？」

「うん、凄いだよ。魔物を数分で動けなくさせちゃうんだって」

「おお、キルティ、すごいー」

『……シュ』

子供達に褒められて嬉しかったのか、キルティの尻尾がパタパタと揺れている。

『シュ、シュ、シュ』

「「え、いいの？」」

『シュ……』

アレンとエレナがキルティと会話？ しているようだ。

「えっと……アレン、エレナ？ キルティは何て言っているんだい？」

「あのね、まものをね」

「たおしてみせてくれるって」

「え、そうなの？」

キルティと本当に会話していたようだ。

僕には鳴き声にしか聞こえなかったんだけどな。

《何なに？ キルティが力を見せてくれるの？》

《わく、それは興味があるわ》

《何か手頃な魔物が来ませんか？》

《ベクトル、次に来た魔物は倒しちゃ駄目なの！》

《うう、わかった》

ジュール達もキルティの毒に興味があるのか、わくわくしたように場を整えようとする。

「アーヤさん、キルティの戦い方を見せてくれることになったみたいなんですけど……大丈夫ですか？」

子供達は盛り上がっているが、さすがにアーヤさんの許可なしに話を進めるわけにはいかない。なので、意見を求めてみた。

「あ、うん、キルティもやる気があるみたいだし、いいんじゃないか？ というか、そろそろ私達も働きたいし、任せてくれ」

「そうですね。そろそろ働きましょうか」

すると、アーヤさんはもちろんのこと、マイラさんも同意してくれた。

《あ、ちょうど良い具合にロックベアーが来たよ》

「タクミ、あのロックベアーは私達に任せてもらおうよ！」

「あ、はい、了解です！」

ロックベアーの相手は、『ソレイユ』ですることになったので、僕達は少し下がって待機する。

「アーヤ、マドリカ、足止めをよろしく！」

「了解！ —— 火よ、集え《ファイヤーボール》」

「光よ、射貫け《ライトアロー》」

『グガーツ！』

エリーさんの合図でアーヤさんが火魔法、マドリカさんが光魔法でロックベアーに先制攻撃をすると、マイラさんが槍、エリーさんが剣を構えて向かっていく。

「キルティ、今だ！」

『シュ〜〜』

マイラさんとエリーさんがロックベアーを正面から押さえ込むと、キルティがロックベアーの背後に回り込んでいく。

そして、隙をついてロックベアーの後ろ脚に咬みついた。

「キルティ、よくやった！」

『シュー!』

あとはキルティの麻痺毒が効いてくるまで、『ソレイユ』は無闇に攻め込んだりはせずに引き気味に防戦を続ける。

「そろそろかしら?」

「倒れる! マイラ、エリー、巻き込まれるなよ!」

ロックベアがふらつき始めると、マイラさんとエリーさんがロックベアから離れる。

すると、すぐにロックベアが――バターンッ……と音を立てて横に倒れた。

「エリー!」

「任せて」

すかさずエリーさんが再びロックベアに接近し、トドメを刺す。

とても流れるような戦いで、そして堅実な戦い方である。

「どうだった?」

「すごかった!」

「そうですね、本当に凄いですよ。とても無駄がなく、いかにも『パーティ戦』って感じでした」
僕達には真似ができない戦い方だ。

「褒めてもらえて嬉しいですわ。ですが、どこか改善点などはありませんでしたか?」

「特に改善しなくてはならないような箇所はなかったと思いますよ。ただ……」

「ただ?」

「キルティが上手く敵の懐に潜り込めなかった時などの対応が気になりますね。それもしっかりと決まっているなら本当に問題ないと思いますけど」

『ソレイユ』の戦い方は、キルティの麻痺毒があつての戦いで、それが上手く機能しなかった場合は長期戦になったり、下手したら自分達が危なくなったりする可能性があると思う。あとは、敵が複数いる場合もかな?

「『ああ……』」

僕の指摘に『ソレイユ』の皆さんが、「やっぱり」と言いたげに声を上げる。

「……えっと?」

「一戦見ただけで、私達の弱点を言い当てられるとは思わなかった」

「そうですね。若くてもさすがはAランクの方ということかしら?」

アーヤさんとマイラさんが、ため息をつく。

どうやら、自分達の弱点はしっかりと把握しているようだな。

「とりあえず、今は索敵をしつかりとして、格上の魔物や群れとの遭遇は避けるようにしている状況だな」

「それは大事ですね。あとは遭遇したとしても、確実に逃げられるようにいろんな手段を用意しておくのも大事ですが……それは?」

「思いつく限りは用意してありますわ」

どうやら彼女達は、自分達の力を過信せずに、確実に生き抜くことを前提にしているようだ。そこでふと、思いついたことを尋ねてみる。

「キルティの毒を採取しておくと、麻痺毒の効果はなくなってしまうんでしょうかね？ 大丈夫なら、武器に仕込むのもありじゃないですか？ マドリカさんの矢とかにね。あ、もうやっていましたか？」

マドリカさんは光魔法のほかに弓矢を使用しているようなので、鏃に麻痺毒を塗っておけば、牽制だけではなく攻撃にも使えそうだと思う。

「あ、マドリカさんの個人戦闘の手段にも使えるかな？」

僕の呟きを聞いて、マドリカさんが期待するような表情になった。実戦で使うことができれば、Bランクが近くなるからな。

「それはやっていませんね。まずはキルティの毒を分けてもらって、成分を調べる必要がありますわね。——アーヤ、キルティが嫌がらなかったら、是非お願いしますわ」

「大丈夫。キルティは協力してくれるってさ」

キルティは快く了承してくれたようだ。

「アレンもキルティのどく、ほしい！」

「エレナもほしい！」

「ええ!?」

その時、何故か子供達が麻痺毒を欲しがった。……何の冗談かと思っただが、顔を見る限り本気のようだ。

「アレン、エレナ、何に使うんだよ！」

「なにかにつかえるかも！」

「だから、もらっておくの！」

「……」

使う目的は特にないようだ。

良かった。麻痺毒を使う予定があったらどうしようかと思ったよ。

『シュ〜』

「「いいの？ やったー！」」

「……会話的に、キルティが『いいよ』とでも言ったかな？」

「「あたり！」」

子供達の要求をキルティがまた快く了承したみたいだ。

ヘルスネイク……直訳すると「地獄蛇」なんて怖そうな名前の魔物だが、性格はとても穏やかだよな。

「「おにいちゃん、おにいちゃん」」



「いれもの！」

「ちょうだい！」

「今？ えつと……これでいいか？」

「うん！」

僕は《無限収納》から空瓶からびんを取り出して渡すと、子供達は早速とばかりにキルティの元へと向かった。

「アーヤさん、いい？」

「あ、ああ、キルティが了承しているから、いいぞ」

「ありがとう！」

子供達はしっかりとアーヤさんにも許可を取ると、キルティの口の前に瓶の口を向ける。すると、キルティは口を開けて牙から液体を垂らした。

「はい、おにいちちゃん、もらったよー」

「あ、うん、ありがとう」

とてもにこやかな笑顔で麻痺毒入りの瓶を差し出してくる。

これ……どうするかな。

「マイラさん、これ、分析ぶんせきに使いますか？」

「それはキルティがあなた達に差し上げたものですから、タクミさんが活用してくださいな」

「じゃあ、ありがたく。——キルティ、ありがとう」

『シュ〜』

時間経過のない《無限収納^{インベントリー}》の中に入れておけば、麻痺毒が無効化されることは確実でないだろうから、いざという時はちゃんと使えるだろう。

まあ、少量だけ別に分けて、《無限収納^{インベントリー}》外に保管して、時間経過でどうなるかの確認はしておいたほうがいいかな？

「じゃあ、キルティの毒の活用方法については、とりあえず今は置いておいて……次はどうします？ 受けた依頼分の採取は終わっていますしね」

「さすがに帰るにはまだ早いから、もう少し回りたいな。可能ならば、また私達の戦闘を見て助言を貰^{もら}いたい」

「それは……」

「駄目か？」

「駄目というか、僕自身があまり戦闘に詳しくないので、これ以上の助言ができるかどうか怪しいんですよ。それに下手なことを言って、悪影響を与えるのも怖いですし……」

僕は戦闘に対しては本当に素人^{しろうと}だから。下手なことを言って、『ソレイユ』パーティのバランスが崩れてしまったら大変だ。

「助言については、気づくことがあればいい。その助言についても、善^よし悪^あしは自分達でしっか

りと判断すると誓^{ちか}う」

「まあ、それなら……」

アーヤさんに懇願^{こんがん}するように言われると、嫌だとは言えない。

「アレンとエレナもそれでいい？」

「うん！」

「アレンもきづいたこという！」

「エレナもみつける！」

アレンとエレナも『ソレイユ』の戦い方を観察する気満々のようだ。

というわけで、僕達はその後、薬草をせっせと採取しつつ、数度『ソレイユ』の戦闘を見学した。

「どうだった？」

「そうですね〜」

「んとな〜」

戦闘後はその都度、僕達に意見が求められる。

「問題なかったですよ」

「うんうん、もんだいないないー」

それから後の戦闘でも、僕は細かい点だがいくつか指摘し、とりあえず無駄な行動を減らせるようにアドバイスした。

だが、逆に僕達も“パーティ戦”というものをたつぷりと勉強できた。

「さて、そろそろ終わりかな？」

「そうですね、そろそろ戻らないといけませんわね」

日が暮れる前に街に帰りたいので、今回の散策は終了だ。

「アレン、エレナ、帰るよ」

「ええ、まだあそびたい」

「これから、依頼は遊びじゃないよ。仕事はちゃんと報告するところまでしないと駄目だろう」

「うう、わかった」

子供達は名残惜しそうにしていたが、僕達は冒険者ギルドに戻って依頼の報告をした。

そして、『ソレイユ』の皆さんと打ち上げと称した食事を楽しんだから、別れを告げたのだった。

第二章 新しい家族を迎えよう。

今日、僕達は城に来ていた。

何故かというところ……先日のアレンとエレナの誕生日に、プレゼントとして馬の目録を王家から送られたので、それについて話をするためだ。

実は一度、さすがに馬は貰えない……と手紙で丁寧な断りの返事を出した。

だが、王家のほうに納得しなかったのだ。

とりあえず、馬達を見においでと誘われ、子供達の目がキラキラと輝いたため、“遊ぶだけ”と言いつけて馬を見に来たわけである。

「厩舎はあそこだ」

「おうまさん」

「いっぱいいるの？」

「たくさんいるぞ」

案内役はガディア国の第三王子であるアルフィード様——アル様がしてくれている。

『グルルッ』